

## 『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』叢書出版始末小考

静永, 健  
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1500375>

---

出版情報 : 文學研究. 112, pp.17-32, 2015-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

九州大学大学院人文科学研究院  
『文学研究』第一一二輯抜刷  
二〇一五年三月発行

『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』叢書出版始末小考

静  
永  
健

# 『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』叢書出版始末小考

静 永 健

日本のみならず世界の文選学の基礎資料として『文選集注』の発見とその影印版公刊の意義は大きい。近年、中国・南京大学中文系の周勛初教授の監修によって、上海古籍出版社より二〇〇〇年と二〇一一年の両度にわたって出版された『唐鈔文選集注彙存』全三冊は、われわれ中国古典研究者には必携の、まことに貴重な参考図書となっている。だが日本の学界ではよく知られている通り、周教授のこれら彙刻図版の大部分は、その六十数年前に日本の京都帝国大学で景印出版されたものに基づいており、周教授が訪日の際に、手ずからコピー複写して持ち帰ったものが原版として使用されたのである。今日いささか残念であるのは、その原版たる京大本が、もはや日本の古書店でも入手困難な稀覯本となりつつあり、また中国では京大本を見る機会が日本よりも更に少ないために、往々にして上海古籍版のみによって研究が進められていることである。筆者は周勳初先生を深く尊敬し、かつ先生の編集された『唐鈔文選集注彙存』の学恩に心より感謝するものである。だが、それ故にこそ、『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』の全貌と、その出版の経緯等について、ここに小文を草し、周先生の彙刻の補助的説明を行いたいと思うものである。<sup>(1)</sup>

さて、『京都帝国大学文学部景印旧鈔本』十集全三十六冊には、『文選集注』だけでなく、日本に残る他の貴重な

旧鈔本の図版も複数種収録されている。以下にその全冊の収録書目を列挙するが、この数十年間に所蔵者が移ったものも少なくない。現在の所蔵者については「↓」記号を付して情報を補充し、またその後、文化庁による「国宝」もしくは「重要文化財（重文と略称する）」の指定を受けているものについても、その情報を補っておく。

【第一集】（大正十一年「一九二二」六月刊行）

\* 狩野直喜序（一九二二年三月）、付録羅振玉書簡（一九一九年五月二〇日）……本稿後述。

① 毛詩唐風殘卷（狩野直喜跋）  
東京和田氏藏↓現在は東洋文庫藏（国宝）

② 毛詩秦風正義殘卷（羅振玉跋）  
京都富岡氏藏↓現在は京都市藏（重文）

③ 翰苑卷第三十（内藤虎跋）  
筑前男爵西高辻氏藏↓現在は福岡太宰府天満宮藏（国宝）

④ 王勃集卷第二十九第三十（内藤虎跋）  
京都富岡氏藏↓現在は東京国立博物館藏（国宝）

【第二集】（昭和十年「一九三五」五月刊行）

① 講周易疏論家記殘卷（狩野直喜跋）  
奈良興福寺藏（重文）

② 經典積文殘卷（狩野直喜校語）  
奈良興福寺藏（重文）

③ 漢書楊雄傳殘卷（神田喜一郎校語）  
西宮武居氏藏↓現在は兵庫上野淳一氏藏（国宝）

【第三集】（昭和十年「一九三五」十一月刊行）

① 文選集注卷第四十七殘欠  
金沢文庫藏（国宝）

② 文選集注卷第六十一上殘欠・同卷第六十一下殘欠  
金沢文庫藏（国宝）

③ 文選集注卷第六十二殘欠  
金沢文庫藏（国宝）

④ 文選集注卷第六十六  
金沢文庫藏（国宝）

⑤ 文選集注卷第七十一

【第四集】（昭和十年「一九三五」十一月刊行）

① 文選集注卷第七十三上残欠・同卷第七十三下

② 文選集注卷第七十九残欠

③ 文選集注卷第八十五上残欠・同卷第八十五下

【第五集】（昭和十一年「一九三六」三月刊行）

① 文選集注卷第五十六

② 文選集注卷第九十一上残欠

③ 文選集注卷第九十一下残欠

④ 文選集注卷第九十四上残欠 首二葉

第三葉以下

【第六集】（昭和十一年「一九三六」三月刊行）

① 文選集注卷第九十四中

② 文選集注卷第九十四下

③ 文選集注卷第一百二上残欠・同卷第一百二下

④ 文選集注卷第一百十三上

⑤ 文選集注卷第一百十三下

【第七集】（昭和十一年「一九三六」八月刊行）

① 文選集注卷第八

金沢文庫藏（国宝）

金沢文庫藏（国宝）

金沢文庫藏（国宝）

金沢文庫藏（国宝）

渡邊昭氏藏（重文）

金沢文庫藏（国宝）

金沢文庫藏（国宝）

元山元造氏藏

金沢文庫藏（国宝）

金沢文庫藏（国宝）

金沢文庫藏（国宝）

金沢文庫藏（国宝）

東洋文庫藏（国宝）

東洋文庫藏（国宝）

九条道秀氏藏

② 文選集注卷第九

九条道秀氏藏

③ 文選集注卷第五十九上残欠

東洋文庫藏(国宝)

④ 文選集注卷第五十九下

東洋文庫藏(国宝)

【第八集】(昭和十一年「一九三六」八月刊行)

① 文選集注卷第六十三

小川睦之輔氏藏↓現在は京都小川雅人氏藏(重文)

② 文選集注卷第八十八残欠

金沢文庫藏(国宝)

自第一葉至第二葉

小川睦之輔氏藏↓現在は京都小川雅人氏藏(重文)

自第三葉至第五十葉

東洋文庫藏(国宝)

自第五十一葉至第六十六葉

小川睦之輔氏藏↓現在は京都小川雅人氏藏(重文)

第六十七葉

③ 文選集注卷第一百十六残欠

保坂潤治氏藏↓現在は天理図書館藏(重文)

自第一葉至第二十五葉

金沢文庫藏(国宝)

自第二十六葉至第四十九葉

德富猪一郎氏藏↓現在は石川武美記念図書館

自第五十葉至第五十一葉

(旧御茶之水図書館)成實堂文庫藏

【第九集】(昭和十七年「一九四二」六月刊行)

① 文選集注卷第四十三 残一葉

元山元造氏藏

文選集注卷第四十八上 首残欠

上野精一氏藏↓現在は兵庫上野淳一氏藏(重文)

文選集注卷第四十八下 残一葉

佐々木信綱氏藏

首残欠

東洋文庫蔵(国宝)

②文選集注卷第六十一 残二葉

里見忠三郎氏蔵

残二葉

某氏蔵↓現在は天理図書館蔵(重文)

残二葉

土方氏植氏蔵

文選集注卷第六十八

東洋文庫蔵(国宝)

③文選集注卷第九十三

小川陸之輔氏蔵↓現在は京都小川雅人氏蔵(重文)

文選集注卷第一百十六 残一葉

某氏蔵↓現在は天理図書館蔵(重文)

【第十集】(昭和十七年「一九四二」六月発行)

①尚書残卷 自禹貢至仲虺之誥(首尾残欠) / 自酒誥至召誥 /

自君奭至立政(首残欠) / 自文侯之命至秦誓

九条道秀氏蔵

②毛詩二南残卷 自関雎至標有梅

大阪大念佛寺蔵(国宝)

各集の発行年に明らかかなように、この影印叢書の刊行は、第一集を刊行した大正十一年(一九二二)と、第二集から第八集までを刊行した昭和十一年(一九三六)、そして最後の第九集・第十集を刊行した昭和十七年(一九四二)の三期に分かれる。最初は、羅振玉が天津に帰国する際(一九一九年)、京都での寓居(永慕園<sup>③</sup>)を売却し、それを京都大学に贖金してこの旧鈔本景印事業が開始された。図版には、現在では日本の国宝および重要文化財に指定されている東京、京都、そして福岡の三地域の旧鈔本が選ばれ、しかも当時の最高技術であるコロタイプ印刷(英= colotype printing / 中= 珂羅版印刷または玻璃版印刷)によって全丁の大きくて鮮明な写真が印刷され、また狩野直喜、羅振玉、内藤湖南の三氏による懇切な跋文が付されている。まことに周到で丁寧な作業であ

る。これは次の第二集にも踏襲された。なお、叢書刊行当時は個人蔵であったもののうち、和田維四郎（一八五六～一九二〇）蔵の毛詩唐風殘卷は現在では東京の東洋文庫の所蔵に帰し、国宝に指定されている。京都の富岡鉄斎（一八三七～一九二四）蔵のものは京都市および東京国立博物館等それぞれ公的機関の所蔵に移っている。第二集第三冊の漢書楊雄傳殘卷は昭和初期の実業家武居綾蔵（一八七一～一九三二）のもとから、現在は歴代朝日新聞社社主をつとめる上野家が所蔵している。

この景印叢書の発端については、この第一集の巻頭に大正十年（一九二一）三月に記された狩野直喜の序文に明らかである。他書に引用されることが少ない文章であるので、ここに掲げる。原文は漢文。ここでは標点符号を加えて示す。

明治辛亥、清廷板蕩、干戈搶攘。我友羅君叔言、携眷東渡、築室京都東山下。閑居無事、乃得大展力於學、其所述作、足以傳後世。君又憾往年黎蕓齋刻古逸叢書、概收宋元舊槧、而不及唐鈔本、挂漏猶多、借得古刹・世家之藏、景印尚書・史記・文選數種、其嘉惠學者、功不在蕓齋下也。大正己未、君將回國、悲其業中廢、託炳卿博士暨余、鬻其田宅、舉所獲捐於京都大學、充印書資。大學因有景印古書之舉、此其第一集也。茲記緣起、且附載君書於後、以見其高義亮節、卓越時俗、而稽古樂善之志、窮而不少衰、尤可敬重云。大正辛酉三月、京都帝國大學教授狩野直喜記。

明治辛亥（一九一〇）明治四四年（一九一〇）清廷板蕩し、干戈搶攘せり。我が友羅君叔言（羅振玉、叔言は字）、眷を携へて東渡し、室を京都東山の下に築く。閑居して事無く、乃ち大いに力を學に展ぶるを得、其の述作せる所は、以て後世に伝ふるに足れり。君 又往年の黎蕓齋（黎庶昌、蕓齋は字）が『古逸叢書』を刻せるに、概ね宋元の旧槧を収めて、唐鈔本に及ばず、挂漏猶ほ多きを憾み、古刹・世家の蔵せるを借り得て、『尚書』『史記』・

『文選』の數種を景印し、其れ恵みを学ぶ者に嘉せば、功は蕪齋の下に在らざるなり。大正己未（一九一九）大正八年）、君 將に國に回らんとするに、其の業の中ばに廢するを悲しみ、炳卿博士（内藤湖南）暨び余に託して、其の田宅を鬻ぎ、獲る所を舉りて京都大学に捐し、印書の資に充てんとす。大学 因りて古書を景印するの挙有り、此れ其の第一集なり。茲に縁起を記し、且つ君が書を後に附載し、以て其の高義亮節の、時俗に卓越せるを見し、而して稽古樂善の志の、窮まりて少しも衰へざるや、尤も敬重すべしと云ふのみ。大正辛酉（一九二一）大正十年）三月、京都帝国大学教授 狩野直喜記す。

またこの狩野序に続けて掲げられているのは、一九一九年五月、天津の羅振玉より狩野直喜、内藤湖南兩博士に寄せられた書簡文である。これも今日では貴重な資料であろう。ここでも原文に標点符号を加えて示す。

湖南・子温先生有道。連得拜教、快何可言。惟離索之感、在眉睫間、爲可憾耳。茲有請者、弟去國以來、萬念灰冷、惟傳古之志、尚未盡衰、頻年略刊古籍、力不逮意、十才一二而已。平昔嘗歎敝國黎蕪齋先生在貴國刻『古逸叢書』、但收宋元槧、而不及唐鈔、至爲可憾、竊不自量、欲身任之。而匆匆歸國、此願莫償。念有寓居可售、以充印書之資、欲鬻宅得款捐入貴國文科大學。即以此資、煩諸先生印唐鈔古籍、而戒行有期。鬻宅一事、非旦夕可就、擬即將此宅、奉煩兩先生、代覓受主、所得之價、悉數捐入貴大學、充印書之用。書成、除頒送各國圖書館外、售價所入、以爲持續之用。區區之志、惟諸君贊成之、宅契令小兒面呈、弟行後、並乞賜接收、無任感荷。弟此次返國、令兒輩設書肆于津沽。若粗可自給、擬修繕京師顧亭林・吳中徐俟齋兩先生祠。敝國近年以來、邪說橫行、道德文章、掃地盡矣。今不爲廉頑立懦計、恐人道馴致于禽獸。故思表章一二先哲、以示模楷、惟志大力微、彌可愧歎、然精衛之志、不能自己也。涑易之間、可以卜居、乃先帝園寢之所在、且密邇關洛、暇日可

爲考古之游。而二三同志在京師者、時得過從、異日即埋骨於此。地僻俗淳、日用至簡。即亭林先生之關中也、會游君子之國、或尚不爲諸君子辱乎。意之所存、口不能宣、特借楮墨、布其區區。此請道安、惟照不宣。弟羅振玉再拜。五月二十日。

湖南・子温先生有道。連りに教えを拜するを得、快く何をか言ふべき。惟だ離索の感、眉睫の間に在りて、憾むべしと爲すべきのみ。茲に請ふ者有りて、弟國を去りて以來、万念灰のごとく冷むるも、惟だ古を伝へんとするの志、尚ほ未だ尽くは衰へず、頻年略か古籍を刊するも、力意に逮ばず、十才に一二のみ。

平昔嘗て敝國の黎蕝齋先生貴國に在りて『古逸叢書』を刻せるに、但だ宋元の槧のみを収め、而るに唐鈔に及ばざるを歎き、至つて憾むべしと爲し、窃かに自ら量らず、身に之を任さんと欲す。而るに匆匆に帰國し、此の願ひ償ふ莫し。念へば寓居の售るべき有り、印書の資に充てんと以ひ、宅を鬻ぎて欸を得たるを貴國の文科大學に捐入せんと欲す。即ち此の資を以て、諸先生を煩はせて唐鈔の古籍を印せば、戒行も期する有らん。鬻宅の一事、且夕に就るべきに非ざるも、即ち此の宅を將て、奉しく兩先生を煩はせ、代りて受主を覓めしめ、得し所の価は、悉數て貴大學に捐入し、印書の用に充てんことを擬す。書成れば、各國の図書館に頒送するを除いての外は、售價の入る所、以て持續の用と爲さん。区々の志、惟だ諸君之れに賛成せば、宅契をば小兒をして面呈せしめ、弟が行りて後、並びに接收し賜ふを乞ひ、感荷に任ふる無からん。弟此次國に返るに、兒輩をして書肆を津沽（天津）に設けしめん。若し粗ぼ自給すべくんば、京師の顧亭林（顧炎武）・吳中の徐俟齋（徐枋）兩先生の祠を修繕せんことを擬す。敝が國近年以來、邪說横行し、道德文章、地を掃ひて尽きたり矣。今廉頑立懦の計を爲さざれば、恐らくは人道は禽獸に馴致されん。故に一二の先哲を表章して、以て模楷を示さんことを思ふ、惟だ志大にして力微小、弥よ愧歎すべきも、然れども精衛の志、自ら已む能はざるなり。涑易の間に、以て居を卜すべくんば、乃ち先帝園寢の在る所にして、且つ閔洛に密邇く、暇日には考

古の游を為すべし。而も二三の同志の京師に在る者、時に過り従ふを得、異日 即ち骨を此に埋めん。地僻にして俗淳く、日び用て至簡なり。即ち亭林先生の関中にあるや、曾て君子の国に遊び、或は尚ほ諸君子の辱しむるところと為らざらんか。意の存する所、口に宣ぶる能はず、特だ楮墨を借りて、其の区々なるを布かん。此に道安を請ひ、惟だ不宣を照らさん。弟羅振玉再拜。五月二十日。

羅振玉の勤直誠実な心情が伝わってくる書簡文である。今日の文選研究においても、決して忘れてはいけない文章であらう。

ところで、『文選集注』の図版を収録する第三集以降この叢書の編集方針には若干の変更があり、各巻末の跋文および校語が省かれている。恐らく『文選集注』については全ての図版が完結した段階で、然るべき解説文を用意する予定であったのかもしれない。だが、第九集が刊行された一九四二年、時代は已に暗黒の状態に突入しており、それらの問題を一切顧慮できぬほどの困難な情況に陥っていたのであらう。第十集の『尚書殘卷』と『毛詩二南殘卷』にも有識者の跋文や解説文は一切見えないのである。

しかし、景印叢書第三集には別刷で「京都帝国大学文学部旧鈔本叢書編纂員」との署名がある一枚の解説が冊子内に挟み込まれている。筆者名は不詳。だが『文選集注』に関する当時の基本的な見解を示すものであり、これも貴重な文章だと言える。原文は日本語、標点も原著に則る。<sup>5)</sup>

文選集注、撰人の姓名を詳かにせず。隋志新舊唐志皆載せず、日本國見在書目また著録せず。疑ふらくは我邦先賢の修述する所か。総べて百二十卷、李善注本の一巻を析つて二巻と爲し、更に其一巻を上下若しくは上下下に析つものあり。此書引く所、李善及び五臣の注の外に於いて、陸善經注文選音決及び文選鈔あり、皆今日

亡佚して傳はらざるもの、最も珍重するに足る。且その李善五臣の二注また今本と異同あり、以て校勘に資すべきもの尠からず。然るに此書人間に流布せず、僅かに平安朝の鈔本一部、永く金澤稱名寺に藏有せられしが、中間散失終に完整し難く、現に金澤文庫に残存するもの十二卷（分卷を計上すれば十九卷）此を外にして所在の分明せるもの十數卷あるに過ぎず。今金澤文庫並に二三收藏家の好意により、相繼いで遺篇全部を借印出版することを得ば、是れ獨り選學を治むる者の幸のみに非ざるなり。昭和十年十一月、京都帝國大學文學部舊鈔本叢書編纂員。

周知の通り、この叢書において『文選集注』の現存する全ての影印を収集することは実現しなかった。しかし、第一集以来この景印叢書の写真撮影を行った人物は、その刊記に記されている通り、明治の写真家小林忠治郎（一八六九―一九五一、又名忠次郎）である。<sup>6)</sup>彼の写真技術は、実兄であり同じく明治の写真家でもあった小川一真（一八六〇―一九二九）が単身アメリカに渡って習得した乾板製法とコロタイプ印刷によるものであり、現在においても日本においては消失した法隆寺金堂壁画の複製や、高松塚古墳彩色壁画、また正倉院御物など最高級の文化財や芸術品の図版に用いられている。だが、大変残念なことには現在の上海古籍版（二〇〇〇年版、二〇一一年版とも）では、簡素なコピー版を底本に使用したために、大部分の図版の文字が不鮮明で、中には軽微な不注意による文字の脱落も見受けられる。例えば、上海古籍二〇〇〇年版では第一冊第三〇頁の右端第一行龍頭には、京大本で見える「音之力反」（戩字の音注）がほとんど見えず、同二〇一一年版の第一冊第三二頁になると全く消されている。上海古籍二〇〇〇年版第一冊第七一六頁の右第一行の末尾、同二〇一一年版では第一冊第七二八頁の右第一行末尾では、京大本では確かに存在した「政」字が欠落している（本来は「賈謚執政」となる）。さらに上海古籍二〇〇〇年版第三冊第二七七頁（二〇一一年版も同頁）右上冒頭の「為」字が過って右半分が切除されているの

である。

上海古籍出版社『唐鈔文選集注彙存』は、間違いなく今後も選学者必携の書物で有り続けるであろう。そして再びおそらく十年後にはまた再版の機会が巡ってくるだろうと思われる。そこで筆者は提言する。第三版再印時には、現藏品かあるいは京都大学の図版をデジタル撮影し直し、鮮明な彙刻を完成させて欲しい。これは日本はもちろん、各国の選学研究の更なる連携によって達成されるであろうと信じるものである。

最後に上海古籍出版社版の頁数に基づいて、その一覧表を掲げておく。なお増補頁の関係で、第一冊のみ二〇〇〇年版と二〇一一年版の頁数とを二段に分けて示す。

【上海古籍出版社『唐鈔文選集注彙存』第一冊対照表】

文選集注の巻数	胡本李善注の巻数	図版の出処	上海古籍二〇〇〇年版の頁数	上海古籍二〇一一年版の頁数	備考 (所注作品名など)
卷七	卷四	横山弘 佐藤道生 <sup>(8)</sup>	欠 欠	一・一 一・二	張衡南都賦 同
卷八	卷四	京大本第七集①	一・一 〜八〇	一・三 〜八二	左思蜀都賦
卷九	卷五	京大本第七集②	一・八一 〜二一七	一・八三 〜二一九	左思呉都賦
卷四三	卷二二	京大本第九集①	一・二一九 〜二二〇	一・二二二 〜二二二	招隱
卷四七	卷二四	京大本第三集① <sup>(9)</sup>	一・二二二 〜二二六	一・二二三 〜二三八	贈答二

卷六三	卷六二		卷六一	卷五九	卷五六	卷四八
卷三二	卷三一		卷三一	卷三〇	卷二八	卷二四
京大本第八集①	京大本第三集③	京大本第三集② 京大本第九集② 成實堂文庫 <sup>(12)</sup>	京大本第三集② 東京蓮念寺 京大本第三集② 京大本第三集② 京大本第九集② <sup>(1)</sup> 成實堂文庫 <sup>(12)</sup>	京大本第七集③ 京大本第七集④	京大本第五集①	京大本第九集① 天津市藝術博物館 <sup>(10)</sup> 京大本第九集① 京大本第九集①
一・七八五～七八六	一・七一五～七八三	一・七〇三～七〇三 一・七〇三～七〇三	一・六二九～六三〇 欠 一・六七五～六八〇 一・六八一～六八九 一・六八九～六九六 一・六九六～七〇〇 一・七〇〇～七〇三	一・四六三～五四〇 一・五四一～六一六	一・三六三～四六二	一・二三七～二六九 一・二七〇～二九二 一・二九二～二九三 一・二九四～三六一
一・七九七～七八八	一・七二七～七九五	一・七二六～七二六	一・六四一～六八六 一・六八六～六八七 一・六八八～六九三 一・六九四～七〇二 一・七〇二～七〇九 一・七〇九～七一三 一・七一三～七一六	一・五四三～六一八	一・三六五～四六四	一・二二九～二七一 一・二七二～二九四 一・二九四～二九五 一・二九六～三六三
離騷	江淹雜體詩劉琨 <sup>(1)</sup>	第三行注「也上」 <sup>(1)</sup>	江淹雜體詩王粲 <sup>(1)</sup> 第六行注「天地之惠」 <sup>(1)</sup> 江淹雜體詩潘岳「俯仰」 <sup>(1)</sup>	雜擬下 劉鑠擬古二首 王僧達 <sup>(1)</sup> 江淹雜體詩李陵「万里」 <sup>(1)</sup> 江淹雜體詩曹丕「高文」 <sup>(1)</sup>	鮑照樂府八首 <sup>(1)</sup>	贈答二 第四行注「帝京」 <sup>(1)</sup>

【上海古籍出版社『唐鈔文選集注彙存』第二・第三冊対照表】

文選集注 の巻数	胡本李善 注の巻数	図版の出処	上海古籍版の頁数 (二〇〇〇年版と二〇一二年版とは同頁)	備考 (所注作品名など)
卷六六	卷三三	京大本第三集④	二・一〇〇～七九	備考 招魂 招隱士
卷六八	卷三四	京大本第九集②	二・八一～一八四	曹植七啓
卷七一	卷三六	京大本第三集⑤	二・一八五～二五八	令教 策秀才文
卷七三	卷三七	京大本第四集① 中国国家図書館 京大本第四集①	二・二五九～二八九 二・二八九～二九二 二・二九二～三五五	表 第五行注「良曰」 第四行注「李善曰」
卷七九	卷四〇	京大本第四集②	二・三五七～四六七	彈事 牋
卷八五	卷四三	京大本第四集③ 京大本第四集③	二・四六九～五〇六 二・五〇六～五八五	書 第二行注「克殷」
卷八八	卷四四	京大本第八集②	二・五八七～七一八	檄
卷九一	卷四六	京大本第五集② 京大本第五集③	二・七一九～七八三 二・七八四～八六一	序下
卷九三	卷四七	京大本第九集③	三・一〇〇～一九四	頌
卷九四	卷四七	京大本第五集④ 京大本第六集① 京大本第六集②	三・一九五～二七三 三・二七四～三二〇 三・三二一～三九〇	賛

卷九八	卷四九	台湾中央図書館	三・三九一～五七三	史論上
卷一〇二	卷五一	京大本第六集③	三・五七五～六一〇	王褒四子講徳論
卷一一三	卷五七	京大本第六集③	三・六一一～六五六	誅下
卷一一六	卷五八	京大本第七集④	三・六五七～七一五	碑上
		京大本第七集⑤	三・七一六～七七八	
		京大本第八集③	三・七七九～八七五	
		京大本第九集③	三・八七六～八七七	
		京大本第八集③	三・八七八～八八〇	

注

- (1) 本稿は二〇一四年八月中国鄭州大学で開催された第十一届中国文選学会に参加するために起草したものである。学会当日は本稿の内容に基づいて、あらかじめ中国語訳された原稿を用意し(広島大学の陳許准教授の翻訳による)、静永がその概要を口述した。この学会の開催の概況等については、静永の別稿「『文選』に帰ろう―中国文選学会第十一届年会参加報告記―」(東方書店『東方』第四〇七号、二〇一五年一月)を参照されたい。
- (2) 現在の所蔵者および国宝・重文指定の有無については文化庁監修『国宝・重要文化財大全7書跡上巻』(毎日新聞社、一九九八年)に拠る。従って、国宝・重文指定を受けていない個人蔵の旧鈔本については、現在の所蔵者名に変更がある可能性が高い。情報をお持ちの方の補正を請うものである。
- (3) 錢鷗「京都における羅振玉と王国維の寓居」(京都大学中国文学会『中国文学報』第四七冊、一九九三年)を参照。
- (4) この羅振玉の書簡の大意を訳すれば以下の通りとなる(本文に訓読文を掲示したが却って難解になったことを許さりたい)。「湖南内藤虎次郎先生、子温狩野直喜先生…日本滞在中さまざまにお教えをいただき、お礼の言葉も見つか

りません。ただ今は帰国前の慌ただしい中に、一言お礼を申し上げます。一九一一年の辛亥革命で中国を去り、日本に亡命することとなってからは、あらゆる気力も萎えておりましたが、古人の言葉を残し伝えようという気持ちだけは尽き果ててはおらず、及ばずながら幾つかの古籍の出版を手がけました。かつて駐日公使にあつた黎庶昌先生が日本に残る貴重な漢籍を収集複製して『古逸叢書』を刊行しましたが、そこでは宋元時代の印刷本を主とし、唐時代の旧鈔本にまでは及ばなかつたことを私は残念に思い、この旧鈔本の影印出版を実現したいと考えていました。だが、今はからずも帰国することとなり、この念願が果たせないのでありますが、ふと思ひ立つて、私の京都の寓居を売却し、それで得たお金を大学に寄付し、両先生のお手を煩わせて、この旧鈔本の影印をしていただきたいと思ひました。住居の売却は面倒な作業ですが、その代金は全額を貴大学に差し上げ、出版の費用に充てていただこうと思ひます。書籍完成のあかつきには、各国の図書館にこの書籍を寄付し、残りは販売し、そこで得た売上金は、再び以後の続刊の出版費に充てて欲しい。このことに賛同いただけるならば、我が子に住宅の契約書を届けさせます。今回の帰国の後、私は天津で書店を開業するつもりです。そうして、何とか生活できるようにになりましたら、北京の報國寺にある顧亭林先生の祠と、蘇州にある徐俟齋先生の祠を修繕しようと思つています。近年の我が国は、デタラメな考え方が横行し、いにしへの立派な道徳がすっかり駄目になっています。今ここで心を奮い立たさなければ、人道はおそらく禽獸以下に劣つてしまうことでしょう。清帝の陵墓に近いここ天津に居を構えましたので、いつの日か、洛陽や長安など古蹟を遊歴する時も参りましょう。また北京在住の二三の同志とも交流できますので、ここは我が骨を埋めるにまことに相応しい土地です。かつて顧亭林先生が清朝の招きを避け、在野の賢人として陝西省の華陰県に隠棲した例に私もなりたいと思ひます。私の思いのたけの全てを申し述べたいと思ひながら、うまく書けません。まずはこの手紙に一寸したためた次第です。お元気で。再拜。一九一九年五月二十日。」

(5) この文章については、中国の研究者の便宜のために、陳氏による華訳をここに掲げる。「文選集注、撰人姓名不詳、亦未見載於隋志及新舊唐志、日本國見在書目亦未有敘錄、疑爲吾邦先賢修述所爲。總百二十卷、李善注本析一卷爲二、此則又析一爲上下或上中下者。是書所引處、李善注及五臣注之外、尚有陸善經注、文選音決及文選鈔、皆今日所已亡逸之書、彌足珍貴。且李善、五臣二注之中與今本又有不同、資以校勘之處亦不爲尠。然此書久不傳於人間、僅平安朝鈔本一部、久爲金澤稱名寺所藏。中間又有流失、無復完卷。現藏金澤文庫中者有十二軸（如以卷計則爲十九卷）、此外所在分明者亦不過十數卷而已。今承金澤文庫及諸藏家好意、得以相繼借出遺篇、茲以附印、又獨非治選學者之萬幸哉。

昭和十年十一月、京都帝國大學文學部舊鈔本叢書編纂員」

(6) 小林忠治郎については、佐藤進「董康日記に見る小林忠治郎」(『二松』第二三集、二〇〇九年)、および同氏「珂羅版之路的開拓者小林忠治郎——以与羅振玉、董康、傅增湘的交流为中心」(『王勇編「書籍之路与文化交流」、上海辞書出版社、二〇〇九年)を参照。

(7) 日本写真家協会編『日本写真史 2840-1935』(平凡社、一九七一年)、飯沢耕太郎『日本写真史概説』(岩波書店、一九九九年)、松田哲夫『印刷に恋して』(品文社、二〇〇二年)を参照。

(8) この「南都賦」断簡(横山弘先生所蔵・佐藤道生先生所蔵の二品)の彩色図版とその釈文は、『六朝学術学会報』第六集(二〇〇五年三月)巻頭に掲げられている。

(9) この集注第四十七卷以降の現神奈川県立金沢文庫所蔵の十九卷については、同館の二〇〇九年の特別展図録『国宝 文選集注と唐物玩味』を参照。

(10) この天津市藝術博物館蔵本については『天津市藝術博物館蔵敦煌文献7』(上海古籍出版社、一九九八年)にも図版が掲載されている。またこの部分の翻字と校勘については、富永一登・衣川賢次「新出『文選』集注本残巻校記」(『中国中世文学研究』第三十六号、一九九九年)を参照。

(11) この京大本第九集②のうち、戦前は某氏所蔵であって、現在は天理図書館に所有が移った部分(すなわち上海古籍『彙存』二〇一一年版の第一冊七〇六頁〜七〇九頁)については、『天理図書館善本叢書・漢籍之部第二卷・文選 趙志集 白氏文集』(八木書店、一九八〇年刊)にも図版が掲載されている。

(12) この石川武美記念図書館(もとお茶の水図書館)成篋堂文庫蔵本については、前注(10)に同じく富永一登・衣川賢次「新出『文選』集注本残巻校記」(『中国中世文学研究』第三十六号、一九九九年)を参照。

(13) この京大本第八集③とある、戦前は保坂潤治氏所蔵であって現在は天理図書館に所有が移った部分(すなわち上海古籍『彙存』第三冊の七七九頁〜八二八頁)、および京大翻第九集③とある、戦前は某氏蔵であって現在は同じく天理図書館に所有が移った部分(すなわち上海古籍『彙存』第三冊の八七六〜八七七頁)については、前注(11)に同じく『天理図書館善本叢書・漢籍之部第二卷・文選 趙志集 白氏文集』(八木書店、一九八〇年刊)にも図版が掲載されている。